

# *The Book and the Brotherhood*

## の同心円的構造

——小説の登場人物の提示法——

大林 幹明

‘David Crimond is here in a kilt!’

‘Good God, is Crimond here? Where is he?’

‘Over in that tent or marquee or whatever you call it. He’s with Lily Boyne.’

The first speaker was Gulliver Ashe, the second was Conrad Lomas.

Iris Murdoch が1987年に発表した小説 *The Book and the Brotherhood* 冒頭の5行少々を引用した。一読したのではとりたてて云々することもなくようにみえる書き出しであるが、全体を読み終えて、あるいはそこまでいかなくとも、ある程度読み進んだ後、読みかえしてみると、小説の登場人物を読者にどのように提示する方法があるかということについて、考えさせられる問題点を含んでいることがわかる。

今「ある程度読み進んだ後、読みかえしてみると」と書いたけれど、実はこの小説は、ある程度読み進んだ後、読みかえしてみる」ことが必要になる、あるいはそうせざるを得ないような書き方がしてある。

また、「一読したのではとりたてて云々することもなくようにみえる書き出し」とも書いたけれども、以下に示すいくつかの小説の冒頭の部分と比較していただきたい。これら6篇の小説はいずれも Murdoch のそれと前後して発表されたものである。<sup>(注)</sup>

1.

At ten minutes to six on the morning of 12 May 1916, James Connolly was lying in a cell in Kilmainham gaol, Dublin, when the door opened and a small crowd of people trooped suddenly in. It is surprising how many officials are needed for an execution.

2.

Monday January 13th 1986. Victor Wilcox lies awake, in the dark bedroom, waiting for his quartz alarm clock to bleep. It is set to do this at 6.45. How long he has to wait he doesn't know. He could easily find out by groping for the clock, ....

3.

'I'm writing a history of the world,' she says. And the hands of the nurse are arrested for a moment; She looks down at this old woman, this old ill woman. 'Well, my goodness,' the nurse says. 'That's quite a thing to be doing, isn't it?'

4.

Exile is the wound of kingship. When some one, recently returned from a transatlantic trip, spoke of seeing a man on crutches taking photographs in the back streets of Oregon City, the rumour at once spread that Saul Henchman had settled in America.

5.

'Will you be eating with us?'

Aunt Deirdre, a tin opener in hand, spoke over her shoulder to her husband without looking round. She let out a little explosion

*The Book and the Brotherhood* の同心円的構造

of annoyance at the bluntness of the instrument. It has a large, wooden handle, and a curved blade, much dented.

6.

New Year's Eve, and the end of the decade. A portentous moment, for those who pay attention to portent. Guests were invited for nine. Some are already on their way travelling towards Harley Street from outlying districts, from Oxford and Tonbridge and Wantage, worried already about the drive home.

いずれも小説の冒頭で、量は Murdoch のものとほぼ等しい。第一の例では、1916年5月の朝 James Connolly がダブリンの刑務所で目をさましたことがわかる。第2の例では、Victor Wilcox がベッドで目をさまし6時45分に合わせてある目覚し時計がもうすぐ鳴る頃だと思っている場面である。3では、看護婦が受持の患者をみている。患者は原稿を書いている、病院の一室であることが推測できる。4では Saul Henchman がアメリカに落着いたといううわさが広まったことがわかる。5では、Deirdre 夫妻の朝食の場面らしいことは容易に思い描くことができる。6については、新年を迎える時で、そのパーティーが話題になっていることが判断できる。

そこでもとにもどり、最初に引用した、Murdoch の小説の冒頭を改ためて読みなおしてみる。Conrad Lomas と Gulliver Ashe が会話していて、その話題として、David Crimord と Lily Boyne があがっていることは明きらかだが、場所とか、4人の関係といったものは判然としない。それにもかかわらず、これだけの部分で4人の登場人物が読者の前に提出されていることに注目したい。

今、普通ならば1人かせいぜい2人の登場人物が描かれているはずのところ、実に4人も的人物を盛り込んだこの小説は、それに続く2ページで、主要登場人物のほぼ全員の名前が示されてしまう。今ここに、それらの名前を列挙

*The Book and the Brotherhood* の同心円的構造

すると、

Gerard Hernshaw

Patricia Hernshaw

Violet Hernshaw

Tamar Hernshaw

Rose Curtland

Sinclair Curtland

Reeve Curtland

David Crimond

Lily Boyne

Gulliver Ashe

Conrad Lomas

Jenkin Riderhood

Duncan Cumbus

Jean Cumbus (néé Kowitz)

Robin Topglass

Professor Leviquist.

上記のうち、Rose Curtland, Jean Cumbus, Robin Topglass, Professor Leviquist を除けば、他はいずれも最初の2ページで提示されてしまう。しかもRose以下の4人も10ページまでには出てしまうので、主要な人物を、読者は実に早い段階で知ることができる。もっともこういう書き方は、若干不正確かも知れない。何故なら、わずか冒頭の数ページで、誰れが主要な人物で、誰れがそうでないかはわからないはずだし、それ以外にも登場人物がいないかどうかは、読了しなければわからないはずである。一応そういったことはあるにしても、この小説では異例ともいえる速さで登場人物の名前が読者に示されてしまう。例えていえば、映画の最初で人物名とそれを演ずる俳優の名前が次々に映し出されるのに似て先に掲げた人物の名前があらわれる。映画であれば、

### *The Book and the Brotherhood* の同心円的構造

そのしきたりに従って、最初に出た名前が主役であるとか、最後に出た名前が最重要俳優であるとか慣例があり、誰れがどのような役をはたしているかは一目でわかるけれども、小説ではそうはいかない。となるとこの小説のように、若干の説明がつくのは当然としても、とにかく名前が次々と示されてそれらの実態が次はどこにでるか不明では、博覧強記の人物ならともかく、普通の読者にとっては、いささか困惑せざるを得ない書き出しになっている。しかも人物のうち、最後まで係わらない者が含まれていればともかく、とにかく全員が何らかの役を演じて最後までつづくこの作品のこのような書き出しが読者に与える効果は如何なるものであろうか。

同心円的構造と題名をつけた理由は、ここから生まれた。この小説は PART ONE: Midsummer, PART TWO: Midwinter, PART THREE: Spring の3部に分かれる。

PART ONE の前半は、Oxford における Commemorative Party の場面であり、それに参加した人々の名前が前述のように冒頭の数ページでひとわたり示された後に、彼らの相互関係が濃淡の差はあるが順次示される。それによって読者は、Jenkin, Duncan, Marcus, Robin が同窓であり、現在どのような仕事をしているかを知ることができるし、Jean と Duncan が夫婦で、彼女は Rose の友人であることもわかる。その Rose は、Sinclair の妹で、兄の方は若くしてグライダーの事故で死んだこともわかる。Lily についていえば、彼女は交通事故で死んだ夫の遺産相続のことで Jean と Rose を介してグループに関係してきとことも述べられている。他方 David Crimond についての記述から、彼と Jean の関係に何かがあるらしいことを読者は感じとる一方、グループの他のメンバーは、そのことを程度の差はあっても知っているらしいということもほのめかされている。このようにして約50ページが PART ONE の前半に充てられ、そこまで読者は登場人物のそれぞれについて、一応万遍なく何らかの情報を得ることになる。しかしその段階では、いぜんとしてそれらの人物のなかで中心となるのは誰れで、どのように展開し、組み合わせられていくかは未

だ不明なのである。

読者が彼らの生い立ち等を知るのは、PART ONE の後半になってからである。例えば Gerard は少年の頃オウムをかわいがっていたが、寄宿学校にいるあいだにそれを処分された。オウムをきらっていた母と姉がそうしたのはともかく、彼の味方であったはずの父がそのことについて明確な態度を示さないことへのわだかまりはその後続いていて、その父は頂度パーティーの夜に亡くなり、現在彼は姉の Patricia 夫妻と一緒にのだが広い家なので姉夫婦がそこを買取りたい希望であることが述べられている。

Jean と Duncan の関係はパーティーの翌日、決定的に悪化し、彼女は別かれて Crimond の許へ行くのだが、実はこれは Jean が Duncan と別かれる 2 回目の事件である。第 1 回は、2 人が仕事で Dublin に滞在中、Duncan が家に Crimond のものと思われる髪の手束を発見したことがきっかけとなって Jean と Crimond が一緒であることが判明し、Duncan は別居することになる。その後 2 人はよりを戻すのだが、前夜の Commemorative Party に Crimond が出ていたことから 2 人の関係に再び火がついて、彼女は Duncan と再度別れる。その流れのなかで、かつて若い頃著作に専念しようとしていた Crimond が、生活のため仕事をもたねばならない状況になったとき、大作を著すためには、俗事に煩わはされるのはよくないので援助することは出来ないかということから、Crimondgesellschaft という組織を作り皆が金を出しあうこととした。その中心になってとりまとめ役をしていたのが Sinclair であったが、彼は若くしてグライダーの事故で死んだことは前に紹介した。

Sinclair なきあと Gerard がそのグループのまとめ役をしているのだが、彼には Benjamin という伯父さんがいた。伯父さんは女にだらしく、娘 Violet を生ませるのだけれど、彼女の母親とは結婚しない。他方 Violet はある男と関係したのだが、彼女がその男と結婚しないため、2 人の間に生まれた娘 Tamar は現在母親の Violet と一緒にいる。彼女は非常な秀才で大学院への進学を希望しているのだが Violet はそれを断じて認めようとはしないため、Party の翌日から 2 人はそのことについて議論をかさねているのだが堂々めぐ

りをするばかりである。

いうならばこういうことになる。PBRT ONE の前半で、読者は登場人物の現在の状況を知る。その内容はそれぞれの人物の今の立場、仕事の具合を中心として、Party に集まった他の人々との相互の関係について一様に少しずつ情報を得るといってよい。決してある特定の人物にスポットライトをあてて、その人を中心に話が展開されて他の人々との関係とか、それらの人々の現在の事情が述べられているのではない。あくまでもそれぞれの人物独自に説明がなされ、その説明がすすむにつれて少しずつ相互関係がわかってくる。従って読者はこの段階では未だ全体の輪郭を、あるいは今後の見通しを、ある一定の線に添ってある特定の人物を軸として見通していくことはできない。わかることは、それぞれの人物について、万遍なくではあるが、ある程度の内容にとどまっている。

後半になって読者が知るのは、それぞれの人物の主として過去の事項である。生まれ、育ち、そういったものを中心にしてその発展線上で例えば Jean と Duncan の関係のように序々に相互の関係が明きらかになっていく。そのなかで、一つの組織の存在が浮びあがってくるが、それが Crimondgesellschaft であり、この段階でようやく読者は、この小説が、この組織を中心に人物が動いているということを知る。従ってその時点で誰れが主役で、誰れが脇役かの目星がつかなくはないけれど、その点は必らずしも判然としない。というのは、実態からみればこの小説は完全に Crimond が中心になっていいはずである。しかし彼はこの組織に乗っているだけの存在であって、その意味では飾ぎりにすぎない。彼はこの組織を自分の意思で、自分に都合のいいように自由に運営できるかといえはことの性質上それはできない。それならばまとめ役になっている Gerard が主役かといえは、彼もまたそれにはなり得ない。何故ならこの組織は、Crimond を援けるものであって、その意味で Gerard は実体面の存在ではない。この組織自体裏方のそれであって、それが前面にでてはなばなしく何かを行なうというものではない以上、その組織の責任者が脚光を沿びるといふことはこれまたあり得ない。

## *The Book and the Brotherhood* の同心円的構造

このようにして、PART ONE の後半では、そこで何ら新しい人物が加わることなく、それぞれの人物について情報が密になっていくのであってこの段階では登場人物の過去と現在が二段階の構造によって提示される。即ち前半を第一の円とするならば、同じ中心をもった第二の円として後半をとらえることが出来るわけである。もしそこで新しい、しかも全体の流れに重要な役割を演ずる人物が加わるなら話は別であるが、そうはならない。人物はあくまでも最初に固定された幾人かであって、それらの人物に関する情報が次第に増加していくという経過をたどっている。

この構造は、PART TWO: Midwinter になっても根本的に変化しない。読者はここにおいて三度登場人物と等しく相会うことになる。時は移って3ヶ月後の冬。中心となる場面は3つ。Guy Fawks Day の集会と、Reading Party と Crimond を招いて著作の進み具合を問う会である。もちろんそれらに先立つ一連の話があつて、それが上記3つの場面に収束し、それらに続いて一連の話が展開される。

ここでは、Tamar が Duncan の子を宿し、Lily にすすめられてその子を堕ろしてしまうことや、その Lily は Gulliver Ashe と一緒になりたいのだが、失業中の彼は職を求めて北へむかうこと。Violet は強硬に Tamar の進学に反対し、Gerard や Rose の援助を受けることを潔ぎよしとせず断固反対する。一方 Guy Fawks Day の集会で、Crimond の著作の進捗状況についての質問をする会の設定、実行、Reading Party では、登場人物それぞれが、自分の現在の状態を見据えて次の見通しをつけていくなどが述べられている。

そういったなかで読者は Crimond が長年の経過のすえ本の原稿をすでに完成していることを知る。そしてこの小説では、主人公一人を中心に幾人もの人物がかかわるというよりは、Crimond の著作を援けるグループを中心にそれぞれの人物が関与していくという展開をとってきたわけであるから、その本の原稿が完成した時、話は次の段階へ進まなければならなくなる。それはいずれの人物についても考えられねばならないことではあるが、その第一はやはり当事者の Crimond ということにならざるを得ない。



### *The Book and the Brotherhood* の同心円的構造

彼はこの時、Jean と一緒にいたわけだが、著作の完成によって、彼女との関係を再考しなければならなくなる。その解決方は、お互いの死でつけるということになったのであるが、最後の土壇場になって、Jean の決心がにぶり失敗してしまう。そのため彼女は、彼と離れざるを得なくなり結局また Duncan の許に戻るといった経過をたどる。Crimond は、Jean の件で Duncan と決着をつける必要を感じ、彼と会うてはずを整えて待機する。一方 Duncan は事の成り行きから考えれば、彼との対決は不可避であることを悟り、そのつもりで Crimond と会うのだが、2人が会って決定的瞬間をむかえようとした直前その場に Jenkin があらわれて Duncan は誤って彼を射殺してしまう。この事件を Crimond の過失という体裁にして Duncan はその場を去るのであった。この部分が PART TWO の最後の部分になるのだけれども、こういう思いがけない結果になるところは、従来の Murdoch の小説の手法を残していることを感じさせる場面展開であって、読者はそれ故にこそこの小説を読んで、一種の安堵感をおぼえるであろう。

しかし PART TWO 全体としてみるならば、この小説全体についての第3の円を読んだことになる。前述のように PART ONE の前半で人物のある年の夏の時点での事情を知り、後半で彼らのそれまでの歩みを知った読者は、PART TWO で、彼らのその後の歩みを、今回は3ヶ月という現実の時間の経過を経て知ることになる。しかもここにおいても、前回と同様誰れも新しい人物は登場しない。若干の人物の名前かがあらわれはすをけれど、彼らは一回限りのいわば通行人といった体裁で、その後再びあらわれることもなければ、ましてや何か重要な役割を演ずるといった人物は一人もいない。

従って読者は、最初に登場した人物についてそれぞれに一層深く知ることはあっても、新しい人物に出会うことはないわけで、ここでまた従来の円にもう一つのそれが重なったという印象が生じる。いいかえれば、この段階で読者は3つの円を読み了えた状態になる。その中心にあるのは、Crimond を援けるべき Crimondgesellschaft であると考えれば間違いない。

PART THREE: Spring において、この円は更にもう一つ加わり4つの同

### *The Book and the Brotherhood* の同心円的構造

心円が完成する。Gerard は Crimond の原稿を読み、それに対抗する一書を書く必要を感じその成功のためにも Rose と一緒になってほしいと願う。そして2人は長い議論の末、合意に達するが、その後もいぜんとして不安は去らない。それは、Gerard が新しい事を始めるには年をとりすぎていることによろう。Tamar は大学へ戻ることになり Violet も折れてそれを認める。Lily と Gulliver は思わぬきっかけで一緒になることが出来た。Jean と Duncan ももとのさやに収まるけれど彼女は何故 Crimond と別れるようになったかたにいては口を閉ざしているし、Duncan は Duncan で Tamar に妊娠させたことを告げられないで秘密にしているのはいたしかたないことかもしれない。

このようにみえてくると、PART THREE は、「寄せ」にあたるともいえる。碁盤一杯に展開してきた最後の詰めにあたるともいえる。

E. M. Forster は、*Aspects of the Novel* で、Story と Plot を別けて論じている。今まで述べてきた人物を小説の中にいかに登場させるかということは、その両方をつきまぜたような議論なのだけれど結局次のように考えられる。

例えば Forster の *A Room with a View* を考えてみればよくわかるけれどもここではまず Lucy が冒頭に登場する。Part One では、もっぱら彼女を中心に、Florence が舞台となって展開し、ここでは明きらかに彼女を中心に他の役が配されていることがわかる。そして Part Two で Cecil が導入されて新しい発展をみる。このような経緯であれば、読者はこの小説を一連の流れ、即わち直線と認識できるし、またそう思って読んでいくことになる。伝統的といえればそれまでではあるけれど、読者が小説を読む時に小説に期待するのは、少くとも物語りがその主要な Aspect として考えられている限り、当然というか自然の態度であって、またこのような構造をもっていればこそ、ある程度話のまとまりが終った次に発展が加えられるので、仮りに読みを中断しても再度読み始める時にはそれほど苦痛は感じないであろうし、かなりの長さの作品になってもそれ以前の基礎がある以上次々と積み重ねていけるので容易に全体像をつかむことが可能である。もっとも *A Room with a View* など、

### *The Book and the Brotherhood* の同心円的構造

200 ページ前後に収まっているからそれほど長くはないけれど、Henry James の *The Portrate of a Lady* のような作品になっても事情は異ならない。

ここでも、Isabel Archer を中心として、その最初のグループの話がある程度発展、展開した後、次のグループが登場するというパターンである。従って、Gilbert Osmond にしても、Madame Merele にしても、Pansy にしても、彼らが読者の前に姿をあらわすのは、物語がかなり進んだ段階である。この作品はある版では 500 ページ近く、2 部55章は *A Room with a View* の 2 部20 章と比較すればかなりの長さであるけれど、それによって途中で物語りが複雑になりすぎるとか、流れが混乱してしまうとかいう危険はいささかも感じられない。それは読者の側にこの小説の直線的な発展、流れがみえるからである。

これに対し、*The Book and the Brotherhood* は全体600ページ余と、非常に長い作品でありながらその主要登場人物が始めの数ページで全員出つくしてしまうことはすでにみたとうりである。従ってこれらの人物を一つにまとめて最後まで読者を引っばっていくにはどうするか、そこにはおのずと別な工夫があっただけである。そこから出てくるのが当然といえば当然であるけれども、登場人物の相関関係がかかなり複雑になっている点を挙げるができる。例えば Crimongesellschaft の事実上のまとめ役である Gerard は、Hernshaw 家の関係で、Violet, Tamar, Patricia につながり、大学の友人関係で Crimond, Duncan, Jenkin に及ぶ。他の人物についても同様に異なるルートでいくつかの集団に結びつき、それからまた互に一部なりとも重複してかかわりを深めていく。あたかもくもが巣をはるように放射状に展開される部分とそれを相互に結びつける環状の構造とがある。

これらの関係をもっとも象徴的にあらわしているのは次の例であろう。Crimond は、Duncan との関係为解决するために 2 人だけで相対した。そこへ突然 Jenkin があらわれて、Duncan は誤って彼を撃ってしまう。Jenkin が何故突然あらわれたかといえば、Crimond が Duncan に送った手紙を目にした Jean が Jenkin に電話して 2 人が対決するらしいから何とかしてほしいと言ったからで、Jean は自分がそのことを話さなければ Jenkin は死ぬことは

### *The Book and the Brotherhood* の同心円的構造

なかったと考えている。Tamar は Tamar で彼女が自分のことで Jenkin の許を訪ずれたため、彼が一時 Tamar からはなれようとして出かけていったからで、彼女がこなければ Jenkin は死なずにすんだだろうと思っている。Rose もまたその責任が自分にあるのではないかと、因果関係を考える。そしてそれらは一応おかしくなく関係をたどれるものである。皆一様に Jenkin の死に対し責任があることを否定できないような関係を結んでいる。

結局この小説ではすべての登場人物が何らかの形でそれぞれに複雑に関係しているので物語が直線的に発展していくという一つの流れに相当するものがないと統一がとれず分解してしまうはずである。それを防ぐためには何か接着剤のような働らきをするものが必要になる。あるいは全体の中心、核になるようなものといった方がいいかもしれない。そしてそれこそが Crimondgesellschaft である。この作品では核になる Crimondgesellschaft を介してそれぞれの登場人物が結びつけられているといってもよい。いわば Gesellschaft を円の中心としてそれを二重三重に人物がとりまいて一つの世界を構成している。同心円的構造と名づけたのはこの故によるのだけれども、そこでは時間の経過が考慮されなければならないので完全な同心円というわけにはいかないであろう。しかし少くとも最初に読者の前に提示されたどのような関係かの未だ混沌とした状態から次第に焦点が明確になる過程を経て展開される構造のこの小説は、人物を読者に提示する方法として一つの行き方を示した興味ある小説だということが出来る。

Jacket のデザインには、三重の円が描かれ中心に黒点が配されているが、この小説の上記構造を象徴的に示している。

(注) 1 以下順に次の作品である。

1. Terry Eagleton: *Saints and Scholars*, Verso, 1987, London.
2. David Lodge: *Nice World*, Secker & Warburg, 1988, London.
3. Penelope Lively: *Moon Tiger*, Andre Deutsch, 1987, London
4. Anthony Powell: *Fisher King*, Heineman, 1986 London.
5. A.N. Wilson: *Incline our Hearts*, Hamish Hamilton, 1988, London
6. Margaret Drabble: *The Radiant Way*, Weidenfeld and Nicolson, 1987, London.